# 勉強会 報告書

## 聞いてみよう、話してみよう、廃炉のこと

開催日：2021 年 7 月 17 日（土）

記録：　かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop）
作成：　かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop）

2021 年 10 月 13 日発行　不許複製･禁無断転載

# 1. はじめに

かながわ「福島応援」プロジェクトは、福島県内での活動や首都圏に避難されている方々との交流を、さまざまな形で続けています。しかし、東日本大震災からまもなく 10 年目を迎えますが、現地の状況はなかなか県外までは伝わらなくなってきています。福島と縁のある方々、関心を持つ方々にとってもそれは同じです。

当団体の事業のうち「情報発信」事業では、震災と原発事故の影響を受けた地域の方々が、ふるさととの絆を保ちながらそれぞれに暮らしを再建し、また復興に向けて尽力されている様子を伝えることを目的としています。その一環として、年に 2 回、勉強会と講演会を実施しています。このうち勉強会では、主に会員や活動参加者を中心に、事業に関連のあるテーマを取り上げて、質問や感想を共有していただくことで、活動への関心やモチベーションを高めていただく機会を目指しています。

この第 12 回勉強会では、2021 年 4 月、東京電力福島第一原子力発電所に保管されている ALPS 処理水を海洋放出する方針を政府が決定したという報道を受けてこのテーマを取り上げました。講師には、東日本大震災後、さまざまな分断的な状況やあつれきなどを乗り越えるために、対話のための場づくりを続けておられる「未来会議」から菅波香織さんにご登壇いただき、これまでの取り組みやその反響について伺いました。

続いて後半では、グループセッションの時間を設けました。Zoom のブレークアウトルーム機能を使ってランダムにグループに分かれて、参加者それぞれが感じていることを共有していただきました。ここでは「対話」の姿勢を重視し、意見や考えの押し付け合いにならないようにあらかじめルールを提示しました。最後は再び菅波さんに、グループセッションで出たキーワードをピックアップしてまとめていただきました。

なお、参考情報として以下のサイトを事前に紹介しました。

経済産業省「廃炉・汚染水・処理水対策ポータルサイト」

福島第一原子力発電所の今とこれから

https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/hairo_osensui/index.html

経済産業省 資源エネルギー庁 スペシャルコンテンツ

https://bit.ly/3wCBFVf

東京電力「処理水ポータルサイト」

https://www.tepco.co.jp/decommission/progress/watertreatment/

## 2. 開催概要

### (1) 日時・式次第

開催日時　2021 年 7 月 17 日(土)14:00～16:30

会場　Zoom によるオンライン参加＋横浜会場
神奈川県横浜市南区南太田 1-7-20 男女共同参画センター 横浜南

タイトル　聞いてみよう、話してみよう、廃炉のこと

登壇者　未来会議 事務局長菅波香織さん(福島県いわき市在住)

募集方法　こくちーずプロから申し込み受け付け(一般公開)

主催　かながわ「福島応援」プロジェクト(kfop)
協賛　azbil みつばち倶楽部
協力　未来会議

式次第

〔あいさつ〕 ..... 14:00～14:05
かながわ「福島応援」プロジェクト　代表 渡辺孝彦
司会進行 かながわ「福島応援」プロジェクト　広報 東尚子

〔勉強会の主旨と進め方のご説明〕 ..... 14:05～14:10
かながわ「福島応援」プロジェクト　広報 東尚子

〔話題提供〕 ..... 14:10～15:10
未来会議　菅波香織さん

〔休憩〕 ..... 15:10～15:20

〔グループセッション〕 ..... 15:20～15:50
グループごとに感想を共有

〔全体共有〕 ..... 15:50～16:20
グループで出た感想の抜粋を全体で共有

〔質疑応答・閉会あいさつ〕 ..... 16:20～16:30

### (2) 参加者実績

講演会　オンライン 12 人
横浜会場 5 人

懇親会参加者　17 人

### (3) 登壇者紹介

◆菅波香織(すがなみかおり)さん

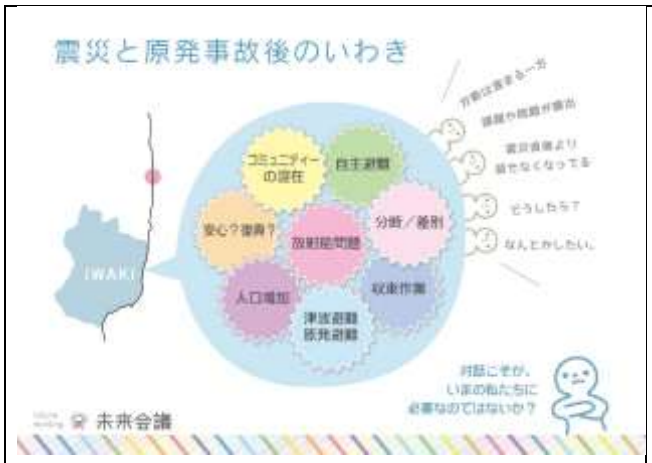
いわき法律事務所弁護士／未来会議事務局長

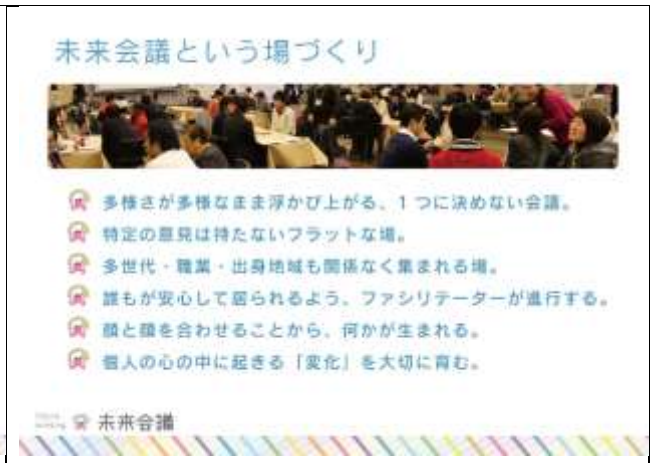
福島県いわき市平生まれ。東京の大学を卒業後に一般企業に就職。二女出産後、女性の生きにくさを痛感し、司法試験受験を決意。2007 年、地元いわき市にて弁護士となる。自身の経験も活かし、離婚事件や子どもの事件、DV 事件や性被害に関する相談業務などを専門として弁護士業務を続けている。

東日本大震災と原発事故の後に生まれた社会の分断の溝を埋めようと、市民らが対話する場として始まった「未来会議」の発起人の一人で、事務局長を務める。未来会議では 2013 年からの 8 年で 100 回近い対話の場を開き、これまでに原発事故で避難した人や、行政、マスコミ、県外在住で福島に関心のある人など、多様な人が参加している。

弁護士法人いわき法律事務所 http://iwaki-law-office.com/

未来会議 http://miraikaigi.org/




(菅波さんご提供資料)

## 3. 話題提供の内容（概略）

菅波さんから「“廃炉”に対話で向き合う」というテーマで話題提供していただいた内用を抜粋して以下にまとめました。

＜未来会議発足の経緯とルール＞

東日本大震災と津波、原発事故の後、地元いわき市ではさまざまな分断やあつれきが生じた。いわき市では津波による被災者には十分な補償がない一方、原発災害の被災者には一定の倍賞があった。そういった境遇の違いから生じるあつれきがあった。いわき市は 30 万人程度の人口だったところに 3 万人ほどが避難され(1 割以上の人口増加)、ぎくしゃくしていた。また、子どもを持つ親は放射線の影響を心配して慎重にならざるをえない一方で、復興を推進したい立場の人からは、気にしすぎると復興の妨げになるという言い方をされることもあった。私自身、子どもを守りたいという気持ちがありつつ、分断を乗り越えるために対話の場「未来会議」を立ち上げた。

未来会議での対話のルールは、相手の意見を否定しないこと、本当の思いを語ること。顔が見える状態で

相手のストーリーに耳を傾けると、自分と違う考えもいったん受け止めることができる。対話を通じて、気づきが得られ、知ることで違う景色が見えてきた。

＜問題意識＞

弁護士として賠償請求の仕事をする中で、東電とのやりとりを何年も続けている方もいて、その間ずっと被害者であり続けなければならないという「立場の固定化」を感じる。被害者が損害賠償を受けるために必要な証拠集めに費した時間は、本来であれば、その人が少しでも新しい暮らしに向かおうとする前向きな時間であったかもしれない。そういう苦しさを見る中で、せめて大事なことの決定プロセスに自分も関わっていたと認識でき、自分たちで決めたのだというプロセスへの関与や納得感があれば、次に向かえるのではないかと考え、合意形成プロセスにかかわるための取り組みをしている。

＜合意形成について＞

合意形成のあり方について。「理解」と「合意」の違い、何をもって「地元の合意」とするのか、誰が「当事者」なのか、地元との協議で足りるのか。一方で、責任が生じるような合意形成にかかわりたくないという人もいる。自分の無関心が誰かを害しているのではないか。当事者意識に欠けるのは、決定に関われないという諦めがあるからではないか。

国連ハビタット（国際連合人間居住計画）では「ピープルズ・プロセス」を提唱し、「答えは住民の中にある」という考えを大事にしながら活動に取り組んでいる。2016 年に参加した勉強会では、実際に起きたパキスタン大地震のケースを用いて、限られた資金と限られた時間の中で矛盾と衝突を最小限に抑えながら、必ず結論を出すという合意形成ワークショップがあった。目指すのは、全員が 100 パーセントの納得ではないとしても、70パーセントの合意を取り付けて進めること。専門家や権力者が一方的に決めるのではなく、市民も一緒に考えながら合意にたどりつくこと。これこそが、原発事故にまつわるさまざまなことを決めるのに、私たちがやらなければならないことではないかと、そう感じた。

日本の現状は、“無知な一般市民のために大事なことは専門家が決めてあげよう”というスタンス。処理水の放出についてもそうで、色々な人の納得感が置き去りにされたと感じ、残念であり無力感を抱いている。ただ、諦めていない人もいる。「1F 廃炉の先研究会」（早稲田リサーチセンター）では、イチエフの廃炉後のあり方を専門家や住民も交えて語り合っていこうという取り組みであり、私もその委員を務めている。理想的な地域像は、住民と専門家が互いに敬意を持ち合い、対等に知恵を交換し合う。住民は一定の責任を引き受け、専門家はそれをサポートする。専門家は選択肢を提示し、住民が主体的に熟議のうえ選び取るというプロセス。住民とは、無知な人ではなく暮らしのプロフェッショナルであり、専門家には見えないことが見えている。

＜当事者性について＞

震災後、「よそ者は口を出すな」、「当事者のみが課題を語る資格を持つ」と言われる状況もあった。その結果、たとえばいわき市の住民は原発のことを話題に出さなくなる、そのようなことが繰り返され、結果的に、誰にとっても良くない「無関心」につながったのではないか。2017 年に、行政の単位を一度取り払ってみることで分断を乗り越えられないかと、バーチャルな「浜通り合衆国」を考える実験をした。地域のことを考えるときのハードルが少し下がり、「自分ごと」、「自分たちのこと」と考えやすくなったという感想があった。

いわゆる“廃炉”については、浜通りでも関心がある人は少ない。自分の暮らしとの関わりがわかりにくいからではないかと考えている。この地域で暮らしていく住民として大事なことなので、みんなで話したい。廃炉は福島の問題というようにマスメディアでは扱われているが、濃淡の差はありながらも誰もが関わりを持つ当事者ではないか。福島以外の地域の人の声も大事だと考えている。たとえば中間貯蔵施設に保管される汚染土を 30 年後にどこに移すのか。“風評被害”に関しては、物理的に離れた地域で暮らす人

も加害者性を持つ当事者。マスメディアは第三者的な立場で報じているが、その報じ方に影響力があるという点では強い当事者性を持つ。実際に経験した人の話を直接聞いて考え、対話することで、当事者であることの気づきが得られるようにし、新しい合意形成のあり方を考えたい。

＜対話について＞

未来会議では、参加者ひとりひとりとの距離が均等である遠方の人をファシリテーターとして招き、安心して発言できる場づくりをしていた。その方がいつもされる例え話で、同じ事実を見聞きしても、解釈は同じとは限らない。「どちらが正しい？」という切り口ではなく、「なぜ相手はそう思うのだろう？」と違いに目を向ける。そうすることで、相手の考えを簡単に否定することは少なくなる。そういう体験をしてきた。答えを共有しようとすると信頼は生まれず、問いを共有しようとすれば信頼が生まれる。

違う考えの人の前で本音を話すことで、傷つくこともある。しかし、対話をしないと大事なことを共有できない可能性がある。誰かが傷つくことを恐れて表現しないでいると、極端な意見や、批判されてもものともしない人の意見しか世の中に見えなくなる。多様な人々との暮らしの中では、傷つくことをも受け入れる必要があるのではないか。

近すぎて見えないこともあり、遠くだからこそ、知らないからこそ見えることもある。いろいろな違いがあるからこそ気づくことができ、そこから考えて新しいアイデアが生まれるかもしれない。

＜科学的事実、安全と安心について＞

データは国や東電などが公開しているが、皆が前提として共有できる絶対的な科学的事実、何が科学的に正しいのかは、非常に限定的であり、どこまでを事実と受け止めるかは人によって違い、それが分断を生む結果にもなった。対話の場で決めつけることはしない。

安全は客観的、安心は主観的とも言われるように、「安心」は人によって違う。また、コロナワクチンの安全性についてもそうであるように、「安全」でさえも専門家によって言うことが違う。議論は必要ではあるが、その議論はさておき、科学的側面だけでなく社会的側面について話すことも大事。

＜県外での処理水の海洋放出について＞

たとえば東京湾に放出したらどうかという意見が聞かれることがあるが、国は法律的にできないと主張しているが、憲法に反しない限り法律は国会で変えられるもの。除染土は県外搬出を約束しているのに、処理水は移動できないという論理はダブルスタンダードではないかと感じる。そういう議論が行われるために、福島だけでなく全国で関心を持ってもらえることがありがたいと思っている。

## 4. グループセッションと感想の共有（抜粋）

東京電力福島第一原子力発電所をめぐって、立場、何を優先するのか、思い描く未来など、思いや考え方はさまざまであることが前提にあります。そのうえで、自分自身はどう感じているのか、どのような未来になってほしいのかを、少人数に分かれてのグループセッションという形で話していただく時間を設けました。

それに先立ち、結論を出すことが目的ではなく、「聞く姿勢をもって耳を傾ける」、「対話する」ことを念頭に置いていただくため、以下のルールを提示しました。

- 全員が話す時間を持てるように配慮する（1 人 5 分の持ち時間）
- 「知らない」は恥ずかしいことではない
- うまく結論をまとめようとしなくていい

- 沈黙の時間があってもかまわない
- 人の話をさえぎらない、否定しない
- 相手を説得しようとしない、同意を求めない
- 断定的、高圧的な言い方は控える

こうした対話という姿勢については、普段あまり経験する機会がないためか、グループによっては個人の考え・意見を強く主張される方もあったようですが、それこそが、いかに対話を成立させるのが難しいかという実感にもつながりました。

セッションの終了後、各グループでの主な話題を全体に共有していただきました。

- いろいろな人がいて、いろいろな意見、グラデーションがあり、それは受け入れなければならないのかなと感じた。
- 廃炉について関心を持ち続けるためにはどうしたらいいか。
- 今回は処理水について参加者に考えてもらう場とイメージしていたが、いろいろな人の話を聞いて受け止める、自分の考えを述べることが大事ではないかと感じた。
- 科学というのはそんなに信用されていないのかと驚いた。
- 事業者、行政、地元住民、その他の人、マスコミの間で対話が十分に成り立っていないために問題が出てきているが、対話しようにもできないほど分断が進んでいるのではないか。
- もっとたくさんの人が参加すると思っていたが少なかった。
- もっと対話が進むような活動が必要だと思った。その点、未来会議ではいろいろなテーマで多くの人を巻き込んで活動されているのが参考になった。
- 処理水の放出については、正しいのかどうかも正直よくわからない。
- 処理水の放出決定の報道はショックだったが、立場によってさまざまな反応があると聞いている。
- 無関心は人を傷つける、関心を持って対話することが大事なのでは、というお話に共感した。
- 合意形成について、今までは行政だけで決めていたが、少しずつ、市民の声を聞くという流れになってはいる。ただ、市民に会議に参加してもらってもあまり意見が出ない。
- 相手の人柄がわからないので話しづらいという可能性はある。そのような場ではファシリテーターがいると合意形成がもっとうまくいくかもしれない。
- 福島だけではなく全国、全世界で共有して考えるべきことではないか。
- 処理水放出によって風評被害を受ける人もいるだろうし、どう解決するか考えなければならない。
- 処理水放出は専門家が検討して決めたことだが、もっときめ細かく意見を聞き、説明する必要がある。
- 福島だけのことではなく、皆に関心を持ち続けてもらうにはどうすればいいのか。

●菅波さんによるコメント

感想を共有していただいた中での何度か出たキーワードのひとつが「いろいろ」。「いろいろ」とは、多様さ、

豊かさである反面、物事を決めるときには難しさとなる。そこで一緒に考えることが大事になる。自分ひとりの考えは小さいものであり、違う視点を混ぜることで、ひとりでは思いつかないことを思いつくこともある。対話をもっとうまくやっていけたらと思うが、これまで、対話が成り立っていないところが課題でもある。なぜ対話が成り立たないのか。相手との間に最低限の信頼もない状態が続いているが、少しでも積み上げていけるものがあればそこに着手しなければならない。

対話するうえで最低限共有しなければならない事実があるのかないのか、そこは難しいといつも考えている。「事実」はひとつでも、誰かが表現する時点でフィルターがかかる。現象でさえも、検査機で数値化してコンピューター処理して人間が読み取るまでに、いくつものエラーが起きうるもの。客観的な現象としては動かしがたいはずのものが、人間がそれを認知するまでにエラーがありえる。

震災後に双葉郡に移住した人が、海洋放出の報道をきっかけに、福島の人たちが日々向き合ってきたことを初めてリアルに感じられたとコメントしていた。それぞれ感じることは自由だが、どう発言し、どう行動するか、海洋放出された後の私たちの暮らしの中で十年前の教訓が良い方向に生かされるように、検証していかなければならないとあらためて感じた。

# 別紙 1　　参加者アンケート

kfop ホームページ内にアンケートフォームを設置して以下の設問にご回答いただいた。

**1.　今回の勉強会の内容について満足度を教えてください**

1-a.　満足できた
1-b.　期待と違っていた
よろしければその理由も教えてください（自由記述）

**2.　勉強会の構成と進め方について満足度を教えてください**

2-a.　満足できた
2-b.　期待と違っていた
よろしければその理由も教えてください（自由記述）

**3.　オンライン（Zoom）参加について該当するものをすべて選択してください**

3-a.　会場まで行く時間や交通費を節約できる
3-b.　手持ちのパソコンやスマートフォンで手軽に参加できる
3-c.　外出を控えているので気晴らしになった
3-d.　画面や音声などが途切れることがある
3-e.　通信料金やバッテリー切れが心配である
3-f.　発言しづらい
3-g.　画面が小さく内容がわかりづらい
3-h.　他の参加者との交流が難しい
3-i.　その他（自由記述）

**4.　今回の勉強会のテーマについて感想や質問があれば記入してください**

**5.　運営者、講師へのメッセージがあれば記入してください**

**6.　あなたご自身についてお答えください。**

性別：男性／女性／回答しない
年代：10 代／20 代／30 代／40 代／50 代／60 代／70 代以上／回答しない

# 別紙 2　　参加者アンケート集計結果

| | | |
|---|---|---|
| 参加者数 | 17 | |
| 回答数 | 14 | （%） |

## 1．今回の勉強会の内容について満足度を教えてください

| | |
|---|---|
| 1-a.　満足できた | 10 |
| 1-b.　期待と違っていた | 4 |

**（コメント欄）**

- 講師の（レポート）聴講を（長時間）強いられ、疲れた。双方向の話し合いの時間が短い。
- 「廃炉のこと」ではなく、「ALPS 処理水の海洋放出と風評被害」となってしまったから。
- 菅沼さんの考え方の一端が理解でき、その活動に共感できることがあった。
- 未来会議、他でのご活動の講話が大変いい勉強となった。
- 聞くこと。知ることの大切さを理解した。
- 廃炉の問題とともに、対話の仕方も学べ、大変ためになった。
- 「期待と違っていた」というのは良い意味です。実際「廃炉」について話すってどうなんだろうと出席したので（当事者からしたら離れたい案件であり目を背けてもいられない問題）
  タイトルが違えばもっと人が集まったかもしれない。実際　福島に興味が無い人はそうだったかも。
- 原発事故の 10 年後の現状、それに被災し関わった福島の皆様の現状がもっと聴けると期待していましたが、ちょっと残念に思いました。
- 相手を知ることの大事さ
- 自分では思いつかない意見や考え方が聞けたので、おもしろかった。

## 2．勉強会の構成と進め方について満足度を教えてください

| | |
|---|---|
| 1-a.　満足できた | 10 |
| 1-b.　期待と違っていた | 4 |

**（コメント欄）**

- 一方的なレクチャーは短時間で終わらせ、参加者の活発な話し合いに時間を割くべき。
- 今回のテーマの講師に、原発災害被害者弁護士に依頼したことが理解できない。偏った意見の方でなく、客観的な意見のお持ちのかたであってほしかった。
- 定常的な会合ではなく一回 2 時間の枠内では講師も限定的に話題を絞る。
- 5 分に区切って一人一人が話せたのはよかった。
- 講演者の気持ちや思いは聞けたと思います。会場での班別の話し合いは、参加者の意見や感想を聞けて良かったです。講演の内容を再確認できました。

- グループに分けて発言をしたが、まとめの方は私の意見を何もとりあげなかった。
- 時間と人数の制約のある中で、話を聞くことができた
- グループディスカッションは必要だとは思うが、人数の割に時間が長かったと思う。

## ３．オンライン（Zoom）参加について該当するものをすべて選択してください

| | | |
|---|---|---|
| 3-a. | 会場まで行く時間や交通費を節約できる | 9 |
| 3-b. | 手持ちのパソコンやスマートフォンで手軽に参加できる | 11 |
| 3-c. | 外出を控えているので気晴らしになった | 3 |
| 3-d. | 画面や音声などが途切れることがある | 4 |
| 3-e. | 通信料金やバッテリー切れが心配である | 1 |
| 3-f. | 発言しづらい | 2 |
| 3-g. | 画面が小さく内容がわかりづらい | 1 |
| 3-h. | 他の参加者との交流が難しい | 7 |
| 3-i. | その他（自由記述） | |

**（コメント欄）**

- ブレイクアウトルームの時間を、もっと充分に取らないと、中身の話が出来ない。
- h はブレイクアウトルームが活用できる。対話が成立する問題意識が大切。
- 聞くこと、対話をすることの勉強会は継続していくと良いと感じる。
- 会場で拝聴しました。

## ４．今回の勉強会のテーマについて感想や質問があれば記入してください

- 内輪だけ（お決まり）の（月並みな）テーマ。外部（若者）からの関心を引くような工夫が必要です。
- 今回のテーマに向き合うには、大いに事前勉強が必要です。また、難しいテーマであって、kfop の勉強会には、不向きと思われました。もう少し気楽に話しが出来るテーマであってほしいです。
- 処理水の問題をはじめとした廃炉へ向けた様々な課題について、人が決めた基準など数値的な物だけで判断する事に危惧を持つ中、多様な意見を聞く事が出来る貴重な機会となった。後半では少人数のグループであったので処理水推進への思いを持つ方の前で自身の疑問や意見を出す事に些か抵抗を感じた。
- テーマは適切であり、主催者と講師は事前の打合せで現地関係者間の生の対立意見を避けてお話しされた。参加者も現地の実情を勉強していたので、講師が何を考え、どのような活動をしているのか理解でき、また自らの立ち位置を考えたと思う。個人的には、別の機会があれば、行政・地元住民・マスコミ・一般国民が使いたがる「安全・安心」という言葉や主張に関して、弁護士としてどのように捉え、何が何が求められ、一人の国民として何が必要と考えているか、聞きたかった。
- 福島で避けて通れない「ハイロ」について、利害関係者を含めた「対話」の場を作り、参加者の

想いや感じ方を率直に発信する場を作っていること、それを継続しているところに強く惹かれた。難しいテーマにおける「対話」の有効性、「合意形成」プロセスに学ぶところがあった。

- 潤沢な対話のためには、傷つくことが避けられないことがある、という言葉が印象に残りました。廃炉の問題についてはさまざまな意見があると思いますが、ある意味で傷つく勇気を持って話し合いを続けゆく必要があると感じました。
- ご年配の方で 「話し方を学びに来た訳ではない。」と言っておられた方がいらっしゃいましたが私は「大事なのは人の話を聞く。否定するのでは無くて！」とか沢山の注意事項がとても勉強になりました。
- 福島の人の気持ちや考えがわかってよかったです。
- 自分ならこうするかと考え、決めていたとしても、実際に動いてみると見えてくるものが変わってくる。自身のことも含め考える機会になった。

## ５．運営者、講師へのメッセージがあれば記入してください

- （主催者に）参加者の意見を（真剣に）聴く姿勢が（本当に）あるのであれば、あのような（規定調和の）時間配分にすること自体、おかしいと思います。
- 講師の方へ
色々な方々の住民感情も、よーく理解しております。科学的な情報、データも関心を持って下さい。
- ー運営の方へー
ボラ活の際も知らない人は意見が言えないと言う感想を何度が感じ、自身の中で溝が開いておりました。まとめる事が目的ではないのではと思いました。正解は一つではなく、様々な思いがあって良いのだと改めて感じました。
- ー講師の方へー
とても勉強になりました。ご活動を支持し応援させて頂きたく思います。機会があれば継続的に勉強をさせていただきたく思います。
- こくちーずは何故あまり動員に役立たなかったのだろうか。講師やテーマの選定は適切と思うし、kfop 正会員、賛助会員や一般者を含めて 60 人程度の想定は妥当と当初思った。一般から 3 人が参加してくれたのはよかった。発信力を会内・外にもっと高めて、アンテナを張っていてくれる人に届けるしかないと思う。
講師の思想全てを知り得た訳ではないが、聞けた範囲では、活動を応援したい。
- 立場の違う人々が集い、こちらの思いを伝えて、相手の思いを受け止めることを継続していくことが信頼につながっていく。信頼関係の大切さを改めて感じました。今後の活動に役立てたいです。ありがとうございました。
- テーマのとらえ方が人により分かれるため、原発、廃炉、処理水そのものに関心が高い・期待した人には、物足りなかったとの声もあり、今回の目的やテーマの提示/説明方法に課題が残る。
- 初心者で、お手数をおかけしました。それでも参加しやすい雰囲気をつくってくださり、大変助かりました。お話も、難しい言葉が少なく分かりやすかったです。もし可能であれば、パワーポイントの資料がもらえたら嬉しいです。
- この勉強会の後に　先生のお名前で検索して弁護士になられた過程を少しだけ知りました。女

性としてその部分を沢山教えて欲しかったなと！福島の話題とはかけ離れてしまいますが…。

・ ありがとうございました。今後も機会がある毎に、お話を聞きたいと思います。

## ８．あなたご自身についてお答えください。

| | | |
|---|---|---|
| 性別 | 男性 | 7 |
| | 女性 | 5 |
| | 無回答 | 2 |

| | | |
|---|---|---|
| 年代 | 10 代 | |
| | 20 代 | |
| | 30 代 | 2 |
| | 40 代 | |
| | 50 代 | 4 |
| | 60 代 | 3 |
| | 70 代以上 | 3 |
| | 無回答 | 2 |

※自由記述については原則としてご記入いただいたまま掲載していますが、明らかに誤字脱字と思われる記述は修正させていただきました。